

美歴だより

諫早市美術・歴史館だより

館長のつぶやき	2
BIREKI・レポート	3
いさはやの生活	4
いさはやの歴史	5
美術の部屋	6
古文書の部屋	7
お知らせ	8

CONTENTS

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.14



諫早公園の「オオカンザクラ」

館長のつづやき

諫早を3分で紹介するために

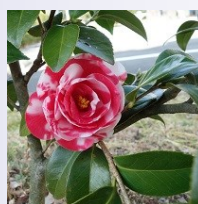
▼昨年度の館長講座で、宮本常一（みやもとつねいち）氏を紹介させて頂いた。宮本氏は、諫早ではあまり馴染がないかも知れないが、柳田國男、南方熊楠（みなかたたくまぐす）にも比肩する日本を代表する民俗学者である。宮本氏は、対馬のイノシシ退治に取り組んだ陶山訥庵（すやまとつあん）、釣針（鉤）の満山俊蔵、捕鯨の益富又左衛門正勝等を紹介し、新潟・佐渡の和太鼓集団・鬼太鼓座や山口・光市の周防猿回しの会の立ち上げにも尽力し、元大蔵大臣・日銀総裁の渋沢敬三氏に「宮本君の足跡を日本の白地図に印すと全体真っ赤になる程」と言わしめ、ノンフィクション作家・佐野眞一氏は『歩く巨人』で世に紹介した。

▼それはさておき、講座では、宮本氏が人々の生きざま・くらしを観察し、記録した姿勢を紹介することに力点を置いたが、関連資料は絞りに絞ったものの、それなりに聴講者には理解いただけたかとも思った。例えば、宮本氏の「日記」は、日々の詳細な行動記録を死の床に就く直前まで書き留めているが、「観察・記録」の姿を教えてくれている。また、何気ない農山漁村の風景、庭先の洗濯干し、農作業などの写真は、地元の方々にとっては当たり前風物だが、人々の生きる姿＝民俗を地域の歴史・変化として今日に伝えてくれる。

講座では宮本氏の「十訓」も紹介した。宮本氏が実家を築立つ時に父・善十郎から教えられたものであるが、その中には、汽車に乗ったら窓

から外をよく見よ、知らない土地へ行ったらまず高い所へ登れ、金があったら名物は食べておくように、時間があつたらできるだけ歩くように、そして人の見落とししたものを見るように等々であった。

▼昨年度最後の講座は、高城会会長の向井安雄氏に「諫早家」について話をさせて頂いた。大変勉強になった。振り返って見るに、諫早家についても、知らないことが意外に多いことに気づいた。特に明治2年の廃藩置県後、諫早家と地域との関係はどうだったのか等々。諫早に住んでいるからには、「諫早学」ではないが、諫早の基本事象をもっと知り、「3分間で諫早のことを語る」ができねば。そのために見落とししたものを発見したいが、セルバンテスのドン・キホーテになってしまいそうだ。



▼本館も平成26年3月開館して今年5年目を迎え、来場者数も13万人を数え、館の庭の「諫早つばき」も「龍造寺やなぎ」も元気に育っている。職員と共に「諫早を理解し、親しみ、愛着を育てる場」の醸成に一層努めたい。しかし、意外にキーワードが見つげづらい。宮本先生

の父の訓ではないが、見落としとして気付かないものがあるのでは。それにはインターネットではなく足と目・耳を使って模索せねばと老骨にムチ打って、でも疲れるー。

BIREKI・レポート

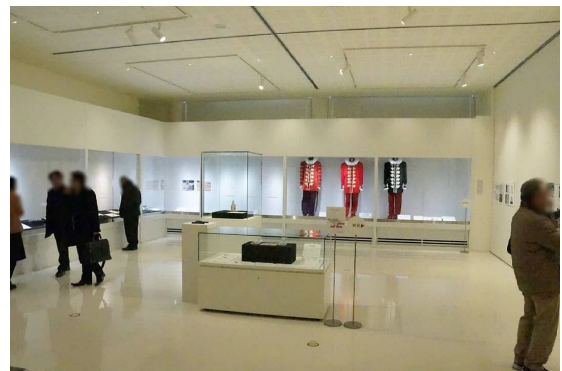
VOL.5 諫早から広がる歴史ロマン！！



▲千々石ミゲル肖像画を基に作った衣装（個人蔵）

1月24日から開催した館企画展「千々石ミゲル墓所推定地出土遺物展」は2月5日、無事終了しました。当企画展では、昨年8、9月に行われた墓所推定地の発掘調査で出土したガラス玉などの副葬品や、千々石ミゲルの人物紹介、諫早で採集されたキリシタン関連の資料の展示を行いました。

出土遺物の一般公開は今回が初めてということで、わずか12日間の開催でしたが、出土遺物をぜひ一目見たい！と、全国から1,216の方がご来場され、大変賑わいました。



▲ 企画展の様子

開催期間中は調査結果報告会として、大浦天主堂キリシタン博物館副館長 大石一久さんに墓石について、別府大学教授の田中裕介さんに発掘調査の結果についてお話をいただきました。熱心にメモを取りながら聴く姿や、今後のさらなる調査を期待する意見なども聞け、歴史ロマンが広がる企画展となりました。

ご来場いただき ありがとうございます。



▲1/28 調査結果報告会



▲2/4 調査結果報告会

いさはやの生活

VOL.1 田植えと結(ゆい)

5月5日の節句が過ぎ、初夏を迎えるころ、田んぼのあちこちでは土を起し砕き、柔らかく、細かく整える作業が見られます。そうして土を整えた田に水を張るといよいよ田植えです。

現在の田植えは田植え機を使っての1、2日での作業ですが、昭和の中頃までは大勢の人たちによる作業で、「結」という仲間内で行っていたものです。

結は「イイ」とも言い、親しい仲間、親戚、所有する田の広さが同じくらいといった間で組みます。だいたい3家族くらいで組んでいました。

一人の田を結仲間全員で植えると次は二人目の田、その次は三人目の田と結仲間内の田を順繰りに回って田植えをします。人数が多いので、短期間で田植えが終わります。

結では田の広さに関わりなく組むこともありますが、これは親戚との結に見られました。田の広さがだいたい同じところと組むのは労働時間を公平にするということでもありました。結いは労力の交換で、通常1日の作業は1日で返すのが特徴です。

また、たとえば田3反を女5人で植え終わると、陽が高くても田植えを終了するなど決めていました。こうした決まり事があるのも結の特徴です。結は農家の間によく見られた慣行でした。



木下吉之丞(きのしたきちのじょう)翁銅像

高城の中腹にモーニング姿の銅像があります。像の正面に「木下吉之丞翁」と下記の碑文、左右に像建立への多くの寄付者の氏名が刻まれています。木下翁は明治～昭和初期に政治家・実業家として、諫早・北高来郡の発展に寄与し、現在の諫早市の文化・産業・教育・交通の礎を築いた一人です。



翁は安政六年(1859)北高来郡小野村(赤崎町)に生る。弱冠二十一才請われて小野村長に就任す。二十五才長崎県会議員に当選、明治三十八年(1905)島原諫早間の鉄道(島原鉄道)を敷設、明治四十二年(1909)開通式を挙行、初代専務取締役に就任す。大正四年(1915)南北高郡民の絶大の支持を得て衆議院議員に当選、県立農事試験場(現栄田町後貝津町に移転)、長崎刑務所(現上野町後小川町に移転)、長崎製糸場(現永昌東町)等を誘致、昭和二年(1927)本明川両岸堤防の大被害を完全復旧に努力す。一方北高子弟教育の向上を計り、諫早家に懇請、邸宅敷地一帯一万三千余坪を県に無償提供の道を講じ、県立旧制中学校(現諫早高校)及び県立農学校(現諫早農業高校)を誘致、更に諫早家に懇請城山を解放して公園化し、北高来郡民の慰安の場を実現さる。晩年小長井村多良岳山麓の山林二百町歩に亘る国有林の拂ひ下げを受け、百町歩の新田を開墾、山茶花、山の神の二大溜池を築造し、移住民の教育の便を計り小学校を建設さる。一代を通じ北高郡民の文化、教育、産業の発展の道を開らき偉大なる功績を残し昭和四(1929)七月十二日七十四才で永眠さる。

長崎県知事 佐藤勝也書／諫早、北高在京諫早人会有志一同建之
銅像製造者 堺 幸山／世話人 江口福一 桑原円作
昭和四十年十月吉日

※()内は著者

大島剛太郎

《練上壺》

練り込みとは陶芸の技法の一つで、異なった色の土を重ねたり、練り合わせて模様をだすものです。焼き上げた後に色を付けたものではないので、表も裏も同じような模様になります。

大正13年、有喜に生まれた大島剛太郎は、58歳で海上保安庁を定年退職になったことを期に諫早市平



《練上壺》1993年 第38回長崎県美術展覧会県知事賞受賞 諫早市美術・歴史館蔵

山町に窯を作り、様々な作陶技術を研究した後、特に練り込み技法の試行錯誤を重ね独自の芸術を追求しました。薔薇やシダ、スズメバチの巣といった自然のモチーフからインスピレーションを受けた作品が多く、天真爛漫な人柄を思わせるおおらかで斬新な作品を多く残しています。

大島剛太郎 大正13(1924)年-平成29(2017)年

大正13年、有喜に生まれる。諫早中学校(現諫早高校)卒業。海軍に入隊し、終戦後は海上保安庁に入庁する。41歳で楽焼の同好会に入り、昭和57年、平山町の自宅に窯を作り本格的に作陶を開始する。上山荘陶芸教室会員として活動する傍ら、自らも講師として後進の指導に当たる。平成29年、93歳で永眠。

古文書の部屋

古文書の文法

古文書の文章は、いくつかの定型文が組み合わさってできています。それらの内の一つが、文末を「～候」と書いて意味としては「～です。」となる文のことを「候文（そうろうぶん）」といい、古文書における文末表現の基本の形となります。

ここでは実際の候文を、多用される動詞との組み合わせの内、3つの例を使ってご紹介します。

例① 「仰」(おおす): 上位者よりの命令。お命じになる。

被 仰出候 (おおせいだされそうろう) 被 仰付候 (おおせつけられそうろう)
被 仰渡候 (おおせわたされそうろう) …など

例② 「下」(くだす): (命令などを)申し渡す。

被下候 (くだされそうろう) 被下置候 (くだしおかれそうろう)
被下度候 (くだされたくそうろう) …など

例③ 「申」(もうす): 申し上げる。

申上候 (もうしあげそうろう) 申付候 (もうしつけそうろう)
被申渡候 (もうしわたされそうろう) …など

参考

「候」の下に付く言葉

間(あいだ): 原因・理由を表す。～ので。～から。

被 仰出候間 (おおせいだされそうろうあいだ)
奉申上候間 (もうしあげたてまつりそうろうあいだ) …など

共(とも)、得共(えども): 逆接の表現。～だが。～であるけれども。

被 仰付候共 (おおせつけられそうろうとも)
御座候得共 (ごぞそうらえども) …など

【その他、「候」の下に付く言葉の例】

趣(おもむき)、由(よし)、通、様、段、付、節

…など

プレゼンテーションウォール開放



常設展示室「諫早の美のコーナー」のプレゼンテーションウォールを下記の期間中に開放し、新緑美しい高城回廊や御書院の庭園を借景とした展示を行います。

期間

4月11日（水）～5月14日（月）

展示資料

現川焼などの館所蔵陶磁器

観覧料

高校生・大学生・一般 200円

小学生・中学生 100円

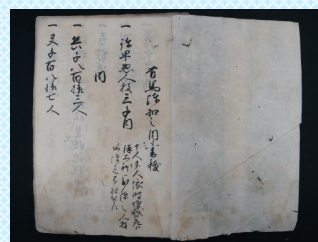
※市内在住または市内在学の小・中学生は無料

※団体（15人以上）割引あり

館講座

歴史講座

古文書に書きとめられた日本史
—天草・島原の乱—



有馬之陣控之内書抜

と き

5月12日（土）午後1時～3時

と ころ

美術・歴史館2階研修室

内 容

寛永14年（1637）～同15年（1638）に起った、天草・島原の乱に諫早家がどのようにかかわったのかをお話しします。

講 師

大島 大輔（美術・歴史館専門員）

その他

受講料無料、事前の申し込み不要

「編集後記」

寒すぎた冬がやっと終わりました！

今年の冬は本当に寒くて・・・。

朝、目覚めるも布団の温もりから離れがたく、毎回30分近くも、起きるべきか、起きらざるべきか葛藤する日々を過ごしておりました。

そして、待ちに待った春！

朝の目覚めも爽やかに、春の陽気に心が躍る季節です。

さて、美歴から徒歩3分の場所にある諫早公園

実はここは知る人ぞ知る、早咲き桜の名所。

この時期、大小2つの眼鏡橋の間で

一面にピンク色のオオカンザクラが咲き誇ります。

オオカンザクラはソメイヨシノより少しだけ早く咲き、花は濃いピンク色で人目を惹きます。

どこからともなく人が集まり、楽しそうに写真を撮る人々の声が、諫早の春の訪れを教えてくれます。

今年は天気にも恵まれ、オオカンザクラからソメイヨシノまで十分に桜を愛でることができました。

美歴は今年5年目を迎えます。

周りの木々と程よく調和した黒と白の外観は、お世辞にも人目を惹くとは言いませんが、中には諫早の歴史や美術が毎日見ごろを迎えています。

桜の次はぜひ、歴史と美術を愛でにおいでくださいませ。

（山本貢）